

One Health Summit 2013

堀田明豊[†] (国立感染症研究所獣医科学部主任研究官)



1 はじめに

One Healthとは、人、動物、環境(生態系)の健康(保全)は相互に関連して成り立つものという考えに基づき、それぞれの健康を担う関係者が協力関係を構築し、その健康を維持・推進しようとする理念である。これは人獣共通感染症(ズーノーシス)の制御に重要な考え方とされている。2004年9月に野生生物保護学会(WSC)とロックフェラー大学が開催した「One World, One Health」(WSCが商標登録)と題する会議以降、国際連合食料農業機関(FAO)、国際獣疫事務局(OIE)、世界保健機関(WHO)、世界銀行、国際連合児童基金がOne Healthの理念の重要性を支持し、いくつかの国際閣僚会議などでその実践が勧告されている。特に高病原性鳥インフルエンザウイルスH5N1亜型による被害が、家禽に止まらず、野鳥や人にまで及んだ東南アジアではFAO、OIE及びWHOが連携し、講演会やセミナーを開催し、One Healthの実践を進めている。

日本ではズーノーシスの発生は散発的かつ限局的で、One Healthの必要性を認識する機会は少ない。しかし平成22年度の国内各地における高病原性鳥インフルエンザ発生経験から、関連行政部局間の連携が必要とされた。また2013年11月、公益社団法人の日本医師会と日本獣医師会は、One Healthの理念に基づき学術協定推進の覚書を締結した。このように日本でもOne Healthの考えが徐々に知られるようになってきているが、まだ体系化されていないのが現状である。

それでは海外諸国ではどのようにOne Healthを実践しているのだろうか。One Healthについて紹介しているホームページ、「One Health Initiative」(<http://www.onehealthinitiative.com/events.php>)にはOne Healthをテーマとした会合等の開催案内が掲載されている。著者はその中の1つ「One Health Summit」に参加し、海外のOne Healthの実践状況を見聞したので、その一部を紹介する。

2 One Health Summitについて

本サミット主催者のGlobal Risk Forum (GRF) Davosは2008年に設立された災害リスクの管理や予防、解決策の情報交換を目的とするスイス連邦の団体で、One Health以外に、災害とリスクをテーマとする国際会議を定期的に開催している。本サミットはOIE及びFAOが後援し、コロラド及びミシガン州立大学、デンバー大学並びにスイスのアレルギー喘息研究所などが共催機関として参画していた。

サミットは2013年11月17日から20日まで、チューリッヒ空港から鉄道で2時間40分のダボスにあるDavos Congress Centerで開催された。約60カ国から380人程の参加があったが、その多くは開催国のスイスとアメリカ合衆国からであった。アフリカからは22カ国、アジアからは17カ国の参加があった。タイ王国の王族の講演があったためかタイからの参加者が多かったが、日本からの参加者は3名のみであった。参加者は大学、研究機関等の研究者、国や地方自治体の職員、国際機関の職員などが主であった。ズーノーシスのセッションでは、参加者の8割以上が獣医学を学んだ者で、他に医学、動物生態学、社会学、環境関連(資源、気候、水質、植物)の専門家と国際機関関係者が参加していた。

3 会議内容

大会場における基調講演及びプレナリーセッションで



図1 大会場におけるセッション
(GRF One Health Summit HPより)

[†] 連絡責任者：堀田明豊 (国立感染症研究所獣医科学部)

〒162-8640 新宿区戸山1-23-1 ☎03-4582-2753 FAX 03-5285-1179 E-mail: ahotta@niid.go.jp

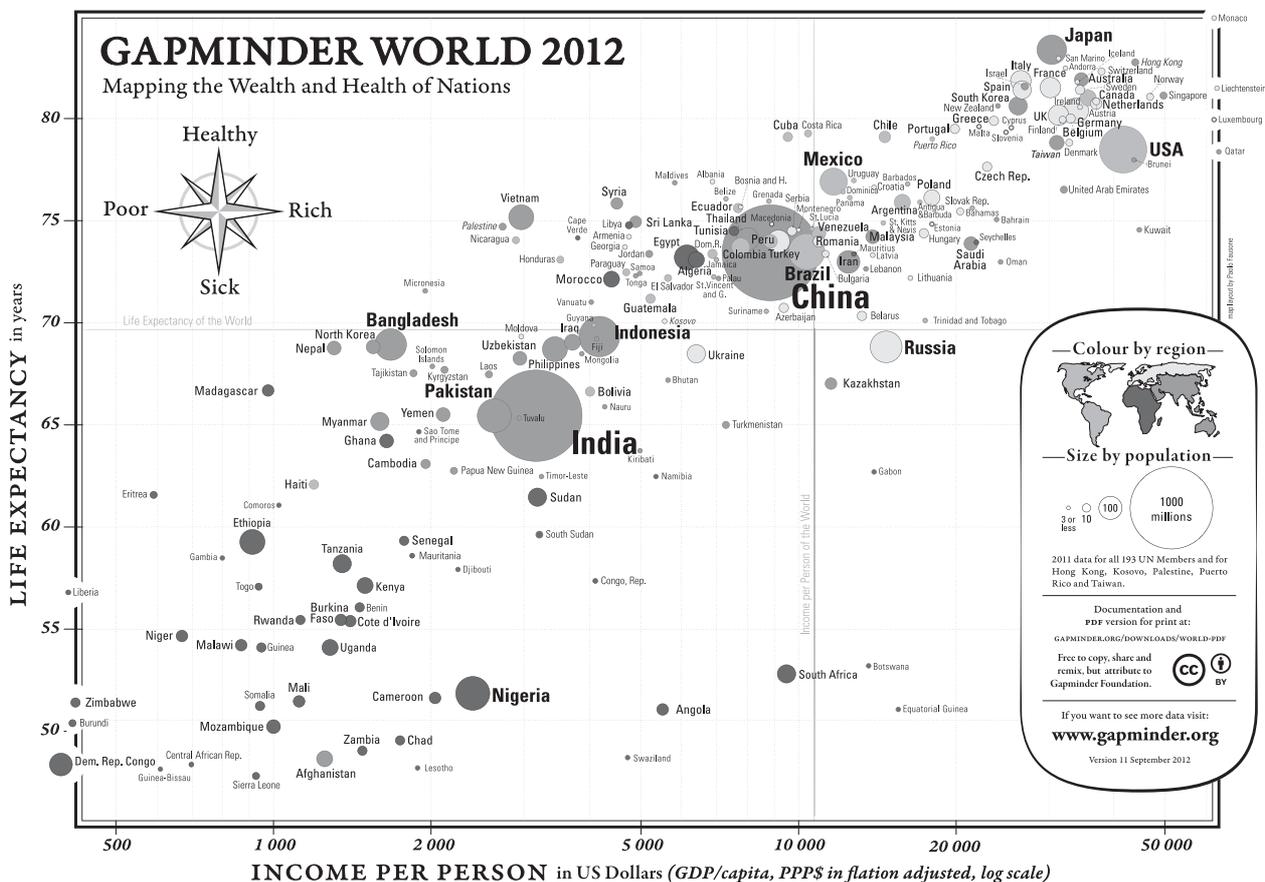


図2 Gapminder World Map

横軸に経済状況（一人当たりのGDP），縦軸に健康状況（平均寿命）を示す。

HP (<http://www.gapminder.org/downloads/>) より

は、「気候変化と食料供給，感染症制御との関わり」，「Water Sanitation and Hygiene（国連難民高等弁務官事務所の水，公衆衛生，健康に関する事業）の活動」，「水質汚染問題」，「FAO，OIE及びWHO共同の狂犬病対策」，「食料供給と水とエネルギー」，「アレルギーと喘息」，「新興ズーノーシスのサーベイランス」，「大学におけるOne Healthの試みと展望」などをテーマとした発表・討議があった（図1）。

小会場では多数のセッションがあった。その半分はズーノーシスに関するもので，特に狂犬病，レプトスピラ，牛型結核などについての発生事例，疫学調査，ワクチンプログラムに関する演題が多かった。鳥インフルエンザをテーマとする演題はネパールからの1題のみであった。他には生態系，気候変動，水質汚染，食品衛生，貧困，教育，高齢化社会，福祉，障害者，花粉症などの問題，各国のOne Healthの取り組みに関するセッションがあった。ポスター会場では30程の演題が全期間を通して掲示された。全体として，テーマが非常に広い範囲にわたるため，深い討議に進まない面もあったが，One Healthに関わる問題は感染症以外にも様々あることを認識させられた。

著者の印象に残った発表は地域の違いから大きく3つに分けられる。後進国からの発表は公衆衛生インフラの整備，獣医師や畜産農家への衛生知識の普及，ワクチン接種の拡大，顧みられない感染症の対策など，国際機関やアメリカやオーストラリアの研究者との共同プロジェクトの成果の紹介が多かった。欧州からの演題では動植物情報，家畜や野生動物の疾病サーベイランスシステム（The European Network for Animal Disease and Infectiology Research Facilities, WildTechなど）や，オランダにおける行政及び研究機関の関係者による定期的な会議の実施の紹介があった。これらの演題は先進国におけるOne Healthの実践例として興味深い。以上のように欧米各国とそれらの国に援助される後進国ではOne Healthの実践が進められているようであった。一方，日本同様，アジア辺境の先進国，大韓民国の状況は日本と大きく変わらないようであった。2012年にソウル大学が中心となり開催したフォーラムなどにおけるOne Healthの普及活動等の状況説明があった。

4 おわりに

日本は公衆衛生インフラが整備された，GDPと平均

寿命は世界で高い水準に位置する国であり (図2), 人が病原体により生命を危ぶまれる例は減少傾向にある。そして2050年には人口が1億人を下回ると試算されている (高齢社会白書)。一方, 世界に目を向ければ, 衛生観念が高くない国が多く, 死因は感染症によるものが多い (WHO)。国連推計では2050年の地球全体の人口は93億人に届くとされているが (2011年は70億人), 食料供給など多くの問題が残っている。このように世界の状況とギャップがある日本でOne Healthの全体像や重要性を理解することは難しいかもしれない。しかし地球全体の問題の解消のために多くの国でOne Healthの実践が支持されていることは確かである。次回のOne

Health Summitは本年10月にダボスで, またInternational One Health Congressという国際会議は2015年にオランダで開催される。世界のOne Healthの実践状況の知見は, 日本のOne Healthの基盤構築, 国際援助方法の検討に有用と思われるため, 獣医学や医学以外の研究者を含め, 行政機関関係者にもその動向を注視して欲しい。

稿を終えるにあたり, 本調査は(独)科学技術振興機構先導的創造科学技術開発費, 地域社会における危機管理システム改革プログラム (各種感染症への対応)「鳥インフルエンザ防疫システムの構築」「One Healthの実践による感染症制御の新戦略」の一部として助成を受けたことを附記する。